

聖書 使徒言行録2章1節～13節

02:01 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、02:02 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。02:03 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。02:04 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。02:05 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、02:06 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。02:07 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。02:08 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。02:09 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、02:10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、02:11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」02:12 人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。02:13 しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

説教『聖霊に満たされ、神の御業を語る』

◆このように2016年聖霊降臨節礼拝を共に捧げ得る幸いを心から感謝致しく思います。只今朗読されました聖書には、『キリスト教会』誕生の次第が記されております。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」とあります。「五旬祭」はイスラエルの三大祭の一つです。新約聖書のギリシャ語では「ペンテコステ」という言葉で、「五十日目」という意味です。このような次第で、弟子たちは聖霊に満たされ、伝道を始めたのです。

◆ですからキリスト教では、この日を『聖霊降臨日』として大事に守るわけです。キリスト教は何といても旧約聖書の宗教ユダヤ教を母体としています。ユダヤ教の三大祭の第一『過越祭』です。キリスト教の『復活節』とほぼ同時期です。それから50日目に『五旬祭』があります。そして秋に『仮庵祭』があります。出エジプトの後、荒野をテント住まいをしながら約束の地に向いました。それを想起するのが『仮庵祭』です。この五旬祭の日にキリストの弟子達が一つになって集まっていると、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話したのです。これがキリスト教会誕生の次第であり、「聖霊降臨」であります。

◆9節以下に、当時の世界中の地名が列挙されています。ご存知のように、イスラエルという国は紀元前6世紀以降、いわゆる「国家」としての独立性はありません。彼らは宗教国家として、旧約聖書の民として、いわば『宗教国家』として結束していたのです。そのアイデンティティーを確認する場・時が「三大祭」だったのです。ですから、ユダヤ人た

ちは世界中に難民として散在していたのです。そして、世界の諸国に居ついたので。しかし祭りの時は、男達は祭りを厳格に守ったのです。ですから、「ほかの国々の言葉」とか「自分の故郷の言葉」というのは、世界に散在していたユダヤ人達が話す言葉のことです。

◆ユダヤ教徒は、「五旬祭」を守るために、それこそ、世界中からエルサレムに来ました。そして彼らは、ガリラヤ出身のキリストの弟子たちから、自分たちの生まれ故郷の国語で神の大きな御業について語るのを聞いて驚いたという次第です。しかし、「あの人たちは新しい葡萄酒に酔っているのだとあざける者もいた」とも記されています。ちょうどお酒に酔ったような感じで、いろいろな言葉を語っている様子が伺えます。このような驚くべきことが起こって、私たちのキリスト教会が始まったのです。

◆それで上述しましたように、「過越祭」から五十日目に「五旬祭」がありました。イエス・キリストは「過越祭」の時に、十字架にかけられて殺されたのです。その後、弟子達は、一時、故郷ガリラヤに戻りました。けれども彼らは、復活の主イエスの顕現を経験し、また主イエスの御言葉を思い起こし、彼らはまたエルサレムに戻って来たわけでありました。彼らはガリラヤに戻り身をひそめて安穩に暮らしたい思いもあったと思いますけれども、復活の主イエスの御言葉に促されて、エルサレムに帰ったのです。

◆使徒言行録1章3節～5節にこうあります。「03 イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。04 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。05 ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」また1章8節～8節にこうあります。「08 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」これらのイエス様のお言葉に捕えられて、いったん故郷に帰ったものの、またエルサレムに戻り、彼らは聖霊の注ぎを受けたのであります。

◆聖書によりますと、私たちが信じている神様は、イエス・キリストという方において、わたしたちと同じ一人の人間になられた御方でありました。そしてイエス様は伝道なさり、過越祭の時に、十字架にかけられ、殺され、三日後に復活された方でありました。そして、復活された主イエス・キリストは、そして父なる神様は、霊的存在として、常に私たちと共におられるお方でありました。そしてその愛と憐れみの故に、わたしたちのために最善の配慮をなして下さる、万事を益として下さる御方でありました。このような信仰にまで私たちを導かれて今に至っております。

◆私たちの日本キリスト教会は、聖霊なる神様についての教理も理屈もありますが、現実経験という点において乏しい教会だと思えます。神様は分かる。イエス様は分かる。しかし、「聖霊なる神様」となると、実感が無い。そういう感じの人が多い教会だと思えます。私たちの教会も例外でないと思えます。そういうことでありながら神様と言い、イエス様と言い、そして現臨なさるお方だといってもそれは抽象的で観念に過ぎません。

◆この「霊」という言葉は、旧約聖書でも新約聖書でも、「霊」と訳されると共に、「命」を「息」を、「空気」を表す言葉です。旧約聖書のイザヤ書にはこうあります。「今、わたしの僕ヤコブよ、わたしの選んだイスラエルよ、聞け。あなたを造り、母の胎内に形づく

り、あなたを助ける主は、こう言われる。恐れるな、わたしの僕ヤコブよ。わたしが選んだエシュルンよ。わたしは渴いている地に水を注ぎ、渴いた土地に流れを与える。あなたの子孫にわたしの霊を注ぎ、あなたの末に祝福を与える。」よく申しますようにヘブライ語の文章表現に「並行法」というのがあります。つまり前節で言ったことと同じことを後節で言い換えるという表現法です。「あなたの子孫にわたしの霊を注ぎ、あなたの末に祝福を与える。」つまり「霊を受けること」と「祝福を受けること」とは同じ意味をなしている。ですから私たちは正に今、空気に包まれている。その空気を呼吸してこの命を生きている。これは神様の祝福を受けて、生かされていることなのです。聖霊降臨は、神様の命そのものの注入です。神様の全存在の施与、神様の全祝福の施与、それが聖霊降臨の事実です。

◆今日の『牧師の落穂拾い』をご覧ください。バルトの『教義学要綱』から取りました。「我は聖霊を信ず：「人間がイエス・キリストの御言葉を自分達に語られたものとして認識し、その御業を自分達のために為されたものとして認識し、その使信を自分達の課題としても認識し、更に他の人々の為に自分達なりに最上の事を希望する場合、それは人間の経験、行為として起こるのであろうが、それは人間の能力、決意、努力によって、起るのではなく、ただ神の自由な恩寵においてのみ起るのである。この神の自由な恩寵において、それら一切のことは、人間に施與される。このような施與と賜物における神が、聖霊なる神である。」圧縮されたとても良い表現だと思いますが、一度読んだだけでは分り難いかもしれません。要は、恵みの祝福を賜物として与えて下さる神様が聖霊なる神様なのです。私は今、「神様御自身の全存在と全賜物の施與、それこそが「聖霊降臨」なのだと思いたく思います。この神様に私たちは包まれて、この方を呼吸して、その祝福を受けて今の私たちはあるのです。それで弟子たちは正にこのように御霊に満たされて、恩寵を与って、本当に解放されて、言葉の壁を越えて、神様の限りない恩寵を証ししたのです。神様にはいかなる壁もありませんし、どのような壁も破ることがお出来になるのです。

◆今朝、日曜学校で子供たちに、「今、世界で活躍している日本人のテニス・プレイヤー知ってる？」と聞きましたら、何と皆一斉に「ニシコリ・ケー」と答えました。質問したこちらがびっくりしました。「なんであんなに強いのか？」と聞きますと、「一生懸命練習すから」「そんな素質を持って生まれたから」とか口々に答えました。「それでは錦織圭が試合に勝ってインタビューを受けた時、何語で話している？」と聞きますと、答えはありませんでした。「英語だよ。錦織圭はすごく英語がうまいよ」。「錦織圭が強いのは、彼が一生懸命練習することも勿論あるけれど、先生は彼が世界を意識しているからだと思う。話す言葉も、英語を使えば大体通じるし、錦織圭は世界を意識しているから、目標のレベルが高いのだと思うよ」と話したりしました。

◆弟子たちの場合、「言葉の壁」というのはすごい壁ですね。けれども弟子たちの最初の伝道はその壁を破っているわけです。破っている意識もなく破れている。神様の御心は世界の全被造物を祝福に与らせるということですから、その御心に捕えられ、満たされた者は、「言葉の壁」、ユダヤ教の壁を破るのです。そしてあらゆる人に通じる言葉になるのです。みなさんは「異言」を聞かれたことがありますか。私は大阪と東京とブラジルで聞きました。全く「異言」で何を語っているか分かりません。つまり、完全な外国語なのです。そういう言葉で何を語るかというと、神様の御言葉を語る。神様の恵みを語るのです。ですから

神様の恵みに与ってそれを語るのは異言の中でも最も素晴らしい異言です。神の言葉という異言を語っているわけですから。そういう意味においてわたしたちはいわゆる外国語、を自由に語る事はできませんが、三位一体なる神様に包まれ満たされる時、異言の最たる「神様の言葉」を語る事ができます。そう言えるのが私たちの信仰ではないでしょうか。

◆私は今回ここを読んでおりました、この神様の限りない恵みの事実を家族、友人、知人、すべての人に伝えたいと思わないキリスト者は一人もおりませんが、私達はそのことに失敗してきていると思いました。そしてあきらめていないか。けれどもわたしはもう一度、本当に、生れ変って、もう一度家族にも肉親にも伝えたいと思いました。弟子たちの言葉を通して、世界中の人々が、神様の偉大な業について語るのを聞いたと書いてあります。本当にそのことを私たちがもう一度一人残らず願い、行うのでなければ、私たちの教会は最初にできた教会と異質な教会になっている。

◆これは、今日の朝日新聞朝刊です。原爆詩の朗読を30年続けてきた吉永小百合さんのインタビュー記事です。アメリカのオバマ大統領が今月27日、伊勢志摩サミットを終えて、広島を訪ねる決断をされました。私はこの記事を読んで、「オバマさんが広島訪問の決断に至る一つのきっかけは、吉永小百合さんのこの原爆詩の朗読があったのだ」と思いました。広島訪問に際して、オバマさんが謝罪するかしないかと言うことが焦点になっています。私はこれについて、ずーっとひっかかっていました。謝罪があってもよいが、この非道な原爆を招いた日本はどうかという事を、日本人はやはり厳密に問わなければいけない。原爆を落としていいはずはないが、そのような事態を招いたのは、一体何だったのか？ということはこの機会に我々日本人が本当に問わなければならない。そんないろいろなことがもやもやしていたのですが、71歳になった吉永小百合さんはこうっておられます。全部紹介できませんがこうです。<「だれが落とした」「だれが被害者だ」ということよりも、「とんでもないことが起きた」「とんでもない武器ができて、たくさんの方が、何の尊厳もなく消滅してしまった」ってことですね。それを感じて、オバマさんが広島に行ってください。さるだったら、わたしはとてもうれしいことだと思えます。「加害者」「被害者」ということではなく、未来に向かっての思いとして行ってほしい。>これが吉永さんの表現です。この表現はいいと思えます。これでないと、核廃絶の願いは、アメリカの人にも、世界の人にも、日本人にも染みて行かないと思えますね。

◆ですから使徒たちの言葉が世界の人々の心に染みて行ったのは、そこに一切の壁を越えた神様の限りない恩寵に彼らが浸っていたからです。その恩寵に私たちも与っているのです。聖霊降臨は神様の全存在と全恩寵の施與なのです。これに優る恵みはありません。ですから、私たちももう一度この初代教会に連なる末裔として思いを新たにして、この恩寵に一層与り、これを伝えて行く。そして神様の善き御心が認識され、信じられる、そういう世界が広がって行く、そういうことに仕える教会、一人一人でありたいと思えます。

◆お祈りいたします

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたの限りない御恵みに与っている身でありながら、その事を十分に意識しない者であります。この様な者を憐れみ、あなたの御心が地に成っていく為に仕える者としてください。この祈り主イエス・キリストのみ名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。